

子ども・子育てとソーシャルワーク

少子化と人口減少対策が全国共通のテーマになり、多くの自治体の子育て支援を施策に掲げている。なぜ子育てを支えなければならないのか。

ネット社会になって、たくさんの子育て情報にふれることが出来ても、子どもの成長や発達に対する保護者の不安や悩みが解消される訳ではない。

また、行政などの相談窓口にも、自分で調べて足を運ぶことに抵抗感のある保護者も少なくない。

子育て支援に当たる行政にとっても、相談が必要だと思える保護者が相談に来ないことや、相談に来ては細かく調べすぎて悩みの全体像がつかみにくい場合などがある。

岩見沢市では、これら保護者の悩み、支援者の悩みを解決するために必要なのは、支援者が連携して相談に当たるソーシャルワークだと考えた。

商業ビルの再生と子育て支援拠点の整備

2009年、中心市街地から大規模店が撤退し、その商業ビルの再生過程では、子育て支援がテーマとなった。2012年、第1段階の再生に当たっては、子どものあそび場と教育委員会が、所管する子育て支援部門とともに郊外から移転し入居した。

これにより子育て支援部門の利用者が増え、その効果を確かめられたことから、第2段階の整備として、母子保健部門を加え、こども・子育て広場「えみふる」を2016年4月にオープンした。

「えみふる」とは、子育て支援拠点の愛称で、笑み・笑顔がいっぱいにあふれる場所という意味で、整備に当たっては、中心市街地活性化基本計画にもとづく社会資本整備総合交付金を活用した。

移転にともなう、もう一つの効果は、支援に当たるボランティアの満足度が上がり、自ら活動を楽しんでいただけるようになったことだった。

実現のための3つの戦略

子育て支援に当たる母子保健や障がい児療育の専門職は所属課が異なるが勤務場所を共有できれば、組織の壁を超えられると考えた。さらに、親子が集まる仕掛けとして、豪雪地帯で望まれていた季節や天候に左右されない屋内型のあそび場の充実を試みた。

そのための戦略は、親子が何度でも足を運びたくなる魅力的な場所にする以下の3点とした。

1点目は、コミュニティの記憶を継承するため、1988年の大規模店オープン時から、ビル内の室内公園に設けられていたミズナラの木をあそび場のシンボルとして残した。



写真 こども・子育てひろば「えみふる」 ごろごろひろば

2点目は、あそび場の面積を3倍に拡大し、子どもの感性を刺激する仕掛けとして、北海道に生息するシマフクロウ、ヒグマなどの木彫、身体を使って遊べる「はらっぱひろば」には3階建ての小屋組や本物の軽トラックなどを設置した。また、静かに遊べる「ごろごろひろば」におくテーブルや書架、通路のベンチやテーブルは、待ち時間も楽しく過ごせるようデザインに工夫を凝らした。

3点目は、ローカリティの復権として、東京発から地元発への発想の転換を試みた。

地域ならではの温かい雰囲気をつくるため、地元の高校や大学に通う青少年の参加を促すほか、ご当地体操のPRキャラクター「イワくん」の着ぐるみを定期的に登場させた。

これら3つの戦略にもとづき整備した「あそびの広場」には、子育て支援に必要な親子と支援者をつなぐ磁石の役割をもたせた。

ヨコのつながりをつくるための課題

開設後、2年が経過し、課題も見えてきた。親子を支援する各部門の専門職が連携して、活動するためには、情報共有と信頼関係が不可欠である。ヨコの連携をつくるための運営会議と、支援を必要とする親子へのケアについて協議するための連携会議を定期的に開催しているが、意見がまとまらないケースもある。

そこで、2018年度から子ども発達支援センターを「えみふる」に加え、相談とあわせて専門職をまとめる中心的な役割も担ってもらうことにした。

会議の場で食い違った意見が出ても、ヨコのつながりで全員が工夫と話し合いを重ね、克服する体制を整えることがねらいだ。

1988年12月、市民に歓迎され、大きな期待をうけて開業した大規模店のキャッチコピーは、「ひとがいちばんあたたかい」であった。この言葉に込められた、まちづくりの精神が「あそびの広場」を核とした、「えみふる」の子育て支援とソーシャルワークシステムという形となって、市民に引き継がれていくことを目指している。